



2023年2月16日放送

印象に残る症例②

五苓散が有効であった声帯のう胞の症例

千葉市立海浜病院 耳鼻咽喉科 部長 久満 美奈子

保存的治療で改善がなく、西洋医学的には手術適応がある状態であっても、患者さん本人は手術に積極的でないこともあります。特にご高齢の方は手術に不安を感じる方も多いですし、外科系診療科といえども、術後の機能温存や整容性を考えると、必ずしも切除することがベストの治療法とも言えない場合もあります。このようなケースで治療の選択肢として漢方薬を提案してみて思った以上に良好な結果を得られることも多いのです。これからお話するのは、五苓散によって手術治療を回避できた声帯のう胞の症例です。

五苓散が有効であった声帯のう胞の症例

症例は85歳の男性です。7か月前から声がれが出現し、声がかがらがる、咳や大声を出すなどの誘因となるエピソードはない、とのことで、当科受診前に2つの耳鼻咽喉科クリニックでステロイド吸入や消炎剤内服治療を行いました。症状改善がないため当科紹介となりました。

既往歴は白内障手術のみで、アルコールは週に1回程度、60歳までは日に60本の喫煙歴がありました。

喉頭ファイバー所見では、両側声帯の可動性は良好で麻痺はなく、左声帯前方にのう胞を認めました。ご本人は手術治療も視野に入れて受診されましたので、全身麻酔科に行う顕微鏡下の喉頭微細手術についてご説明したところ、もう少し薬の治療で効果をみてから手術を決めたいとのご希望でした。前医で一通りの治療が受けてきていたので、追加するならば

ステロイドの全身投与ぐらいしかないのですが、ご高齢なので副作用も心配されることから、ひとまず漢方薬での治療をご提案しました。

体格はしっかりしていて、舌は薄い白苔があり、湿、歯痕はみとめませんでした。

五苓散を1日3包で2週間分処方したところ、再診時には声がれは少し落ち着いたとのことでした。喉頭ファイバー所見でも左声帯のう胞は少し小さくなっていました。さらに1か月間五苓散を継続したところ、歌うときに声がれが気にならない、知人からも声がおかしいといわれなくなったとのことで、う胞は消失とまではいきませんが、初診時と比較して明らかに小さくなっていました。手術も必要なくなったため、紹介元の先生に必要時に五苓散を処方していただくようお願いして終了としました。

五苓散は、口渇、排尿の量と回数の減少を主目標として用いられますが、高齢者にもあまり証を気にせずに使えますし、五苓散の組織中の余分な水分を血中に引き込む作用を期待して、これまで声帯のう胞の患者さんに漢方薬を処方したことはありませんでしたが、手始めに処方してみたところこの患者さんには著効しました。

五苓散は、古くから利尿薬として用いられている漢方薬です。血管内脱水と消化管の余分の水分のアンバランスを是正する処方で、消化管での水分の吸収を促進し、他方で経路的に病理的産物を排除して治癒機転を促進します。朮と茯苓が組織間や胃腸内の水を血中に吸収し、猪苓と沢瀉が血中の水分を腎臓で尿として排出し、桂皮は腎血流量を良くして利尿を助けるといった、利尿作用の薬物で構成されています。

臨床研究において血中の電解質濃度にあまり影響することなく尿量を増やすことや、体内の水分過多の状態では尿量を増やし、脱水状態では尿量を減少させることが報告されているほか、マウスを用いた実験では、フロセミドでは絶水状態でも浮腫状態でもどちらも尿量が増えるのに対し、五苓散では浮腫状態でのみ尿量が増えることが示されています。尿量増加させる機序としては、西洋薬理学的には腎血圧上昇による糸球体濾過量の増加か、電解質の再吸収阻害による原尿濃縮抑制の2通りしかありません。しかし、五苓散の作用はどちらにも当てはまりません。

五苓散の水代謝に関する研究報告によれば、五苓散にはアクアポリンを介した水分代謝調節作用と抗炎症作用の2つの作用があります。五苓散はアクアポリンの水透過性を阻害することで水分代謝調節作用を示し、アクアポリンが亢進させるシグナル伝達を抑制することで抗炎症作用を示すのです。五苓散は、血漿の電解質濃度を変化させることなく尿量を増加させ、しかもその作用は浮腫傾向のあるときだけに現れて、脱水状態では影響しません。

五苓散の抗炎症作用はアクアポリンが存在する部位に生じた炎症に特に優れた効果を示すと考えられます。五苓散が脳浮腫や慢性硬膜下血腫に臨床効果を示すのは有名な話ですが、これは水分代謝調節作用だけでなく、脳に存在するアクアポリン 3, 4, 5 を介して抗炎症作用を発揮するためだと報告されています。(漢方医薬学雑誌 2015 Vol.23 No.2 (49))

五苓散は他にも肝嚢胞や脾嚢胞、小児の陰嚢水腫などのう胞性疾患に用いて手術療法を避けることができた症例や、外科手術後の浮腫、術後嘔吐、術後乏尿に有効であった症例などが報告されています。また、片頭痛に対しても五苓散は有効であるとされています。とくに天候に影響される頭痛に効果的で、慢性頭痛の診療ガイドラインにもエビデンスのある漢方薬のひとつとして、呉茱萸湯、桂枝人參湯、釣藤散、葛根湯に加えて五苓散も挙げられています。

耳鼻咽喉科領域では、五苓散はメニエール病を中心としためまい症状に対して用いる処方としてイメージされているかもしれません。内耳には、アクアポリン 1, 2, 3, 4, 5, 7, 9, などの多彩なアクアポリンが発現しているとされています。とくにアクアポリン 4 のノックアウトマウスでは聴覚障害がみられるなど、内耳機能において重要な働きをしていると考えられます。そして五苓散はとくにアクアポリン 4 に阻害作用をもつと報告されています。(Otol Jpn 17(3):173-177, 2007)

さて、五苓散は今回の症例の声帯のう胞にも有効であったわけですが、もし五苓散で効果がなかった場合にどうしたらよかったのか？ということも考えます。

この答えとしてタイミングよく、声帯病変に対する漢方治療についてのお話を伺いました。先日行われた日本耳鼻咽喉科漢方研究会の教育講演で、稲葉博司先生による素晴らしく詳細のお話がありました。そのお話によれば、単純炎症による急性声帯炎には麻黄や石膏を含む処方がいそうです。例えば、葛根湯と桔梗石膏の合方や越婢加朮湯、麻杏甘石湯などの処方です。学校の先生など声を使う職業に多い、声帯の酷使による炎症を伴う声帯ポリープでは瘀血病態を伴うとして、抗炎症作用と駆瘀血作用を有する治打撲一方が有効であることが述べられました。そのほかにも駆瘀血剤である桂枝茯苓丸や桂枝茯苓丸加薏苡仁が有効であるとのことでした。また、加齢による声帯萎縮を伴う嗄声に対しては、補中益気湯や人參養榮湯による治療が効果的だそうです。

嗄声を生じる声帯炎や声帯ポリープの治療で、去痰剤や消炎剤の内服、ステロイド吸入で効果がないときに、ステロイド内服が効果的な症例も多いですが、職業病のような状態で、声を使いすぎるたびに嗄声が増悪し、頻回にステロイド内服が必要となる方もいます。そんな症例にも、五苓散やこれらの駆瘀血剤の処方も織り交ぜて治療することができればよいと思います。